アドバンスト マテリアル ジャパン 株式会社
ADVANCED MATERIAL JAPAN CORPORATION
AMJ

2007年（平成19年） 1月15日 月曜日 日刊 産業新聞

非鉄業界を突き進む 2007年 亥年の横顔

中村 繁夫氏
アドバンストマテリアルジャパン社長

アマゾンのIT化に驚く

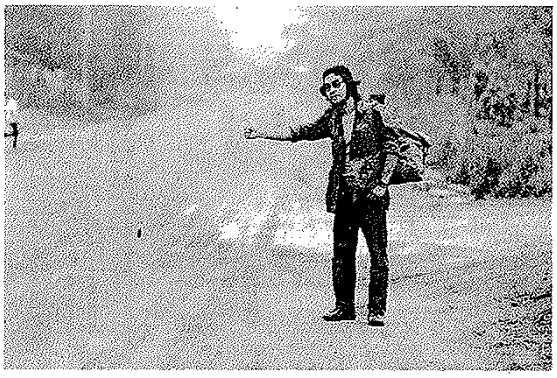
写真は1972年。ブラジルを放浪したときのヒッチハイクの場面だ。当時の思い出を抱きつつ、昨年末にアマゾン州都マナオスを35年ぶりに訪れた。「アマゾンは35年前と今とでは全く変わってしまった」と話す。とくに大きな変化を感じたのが現地のIT化だ。

「ある意味アマゾンは日本から最も遠い場所。でも、このような奥地でもみんな携帯電話を持っていて部屋には液晶があり、問題なくEメールで仕事ができた」

訪問の目的はレアメタル。4時間半かけてピチンガ鉱山に行き、大量のダイナマイトを使って発破採掘している現場を見学した。

「300㍍離れた場所から見学したから、まず最初に地響きが伝わり、その後に爆破の景色が目に飛び込んでくる。それから爆発音が耳に達し爆煙が襲い掛かってくる様は圧巻だった」

この状況から3年経つレアメタルパニックを連想する。「デジタル革命が本格的に到来するのは実はこれからではないか。しかもすごい破壊力を秘めているかもしれない」と話し、デジタル素材として欠かせないレアメタル市況について、「先高観が支配しているが、一時的な需給のアヤではなく構造的な問題だろう」と指摘する。（47年12月5日生まれ、京都府出身）

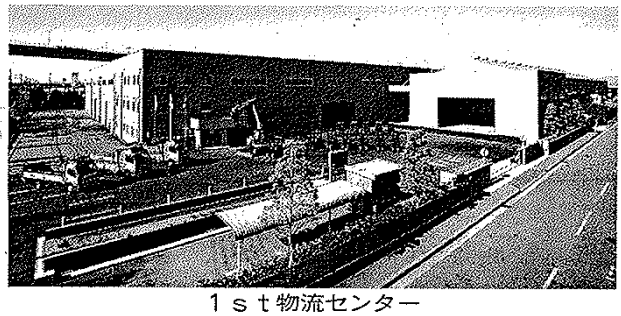


藤田 國廣氏
メタルドゥ社長

泥濘（ぬかるみ）の轍（わだち）

小学生の頃、学校が終わり家に戻ると友達数人で馬蹄形の磁石を持って、近所のあちこちに鉄屑を拾いに行った。鉄屑屋さんに持ち込み、換金して飴を買った。線路脇に置いてあるレールを金鋸で切って、同じ様にして動物ビスケットに換えた。鳥羽市は神社仏閣の多い町である。寺の屋根を剥がし、内側に敷いてある銅板を切ったり、銅製の樋を千切り取ってお金を得、ニッキやハッカの味を楽しんだ。海岸沿いにある町工場が捨てたグラインダーの砥石の芯を割り出し、鉛を貯めた。チョコレートに換わった鉛の味は私達を笑顔で一杯にした。

それからずっと後、私は大阪のステンレス問屋に勤めた。スクラップの部署に入り、様々な金属や合金と出逢った。今、ニッケルやコバルト、チタン、タンタルといったレアメタルやスーパーアロイのリサイクル中心の会社をやっている。今期この業界から170億―180億円の仕事をさせて戴ける様になった。天職とは思わないが、面白い因果を思う事がある。還暦を迎えることとなった。随分来てしまったなぁ、と改めて振り返る。扨て、どうしようかと思う。近年、時代が思ったよりこの仕事に使命を与えた。ビジネスには変わりないので偉そうな事は云えないが、日本の産業や世の中に役に少しでも立つのなら〝もう少し前に進もう、きちんと進もう〟と気持ちを新たにした。（筆、47年10月3日生まれ、三重県出身）



1st物流センター